2018年（平成30年）3月19日　月曜日

ユソー新聞

SRの活用方策など学ぶ

お客様交流会開催

データ・テック　新プログラムも

田野社長

データ・テック（田野徹通保社長）は9日、東京都大田区の産業プラザPioで第26回SRお客様交流会を開催。同社のメイン商品である「セイフティレコーダ（SR）」のユーザー企業担当者らが参加し、ロジパルエクスプレスの担当者による講演などを通じて、SRが安全性向上に果たす効果や役割などについて学んだ。

赤石澤氏

冒頭、田野社長は、SRの導入実績が1千社11万台以上に上っていることを説明した上で、ユーザーのサポート体制を強化するため、3月1日付で本社「お客様センター」内に「運用支援グループ」と「プロジェクト支援グループ」を新設したことを報告。SRの導入から運用、データ活用方策などユーザーの支援強化を進めていることを強調した。

講演では、ロジパルエクスプレス輸送事業部の赤石澤慎アシスタントマネージャーがSRを活用した同社の取り組みを紹介。

同社では、2004年にエコドライブ活動を開始したことにより、07年までの3年間事故件数が順調に減少したものの、08年に再び事故件数が増加したことから新たな安全対策を検討していたところ、すでにSRの導入を済ませていた他社での効果を知り10年に全社で運用を開始した。現在では、映像記録型のSRビデオへの代替を進め、得られたデータを活用したドライバーコンテストなどの取り組みを進めている。

講演の後、今交流会から設けられた新プログラム「取り組みの達人に聴く」で①イワタ輸送センター②八洋③JX金属コイルセンター④大成運送⑤トランス・クリップーの各社でのSRシリーズの導入経緯や活用方策などについて、各社の担当者とデータ・テックの営業担当者が解説を行った。

イワタ輸送センターでは、2016年に車両事故の多発や法改正によるタコグラフの装備義務化などを踏まえ車載器の導入を検討し、4社によるプレゼンテーションを経てSRの導入を決定。現在ではSRの点数により、クオカードなどの表彰を行い社員のモチベーション向上に役立てている。八洋では、毎月SRのデータを、事業所・個人それぞれトップからワーストまで順位付けして公表。また、危険画像が抽出された場合には会議で視聴するなど、データの活用を積極的に進めている。

JX金属コイルセンターでは、工場内の設備間輸送に用いるフォークリフト40台のうち11台にSRを設置。目標得点である70点を下回る運転者には、「運転分析」のグラフを用いて、速度や右左折などの操作方法を指導することなどにより、SR導入当初に35点だった最低点数が66点まで向上している。

大成運送とトランス・クリップでもフォークリフトへのSR装着で安全性を向上させた。